

《精いっぱい、楽しんで》

●【結束の力が勝つチーム】

東京・味の素スタジアムで開会した『ラグビーワールドカップ2019』。日本ではマイナーなラグビーというスポーツ。ただ、今大会で一躍メジャースポーツに押し上げる様な、日本代表チームの大活躍に感涙した人も少なくなかったのではないのでしょうか？結果はご存知の通り。8強入りした日本代表チームの奮闘は素晴らしかった。

試合内容も去る事ながら、チームの目標でもある『ONE TEAM (ワンチーム)』という心の繋がりをテーマに掲げていたことが非常に印象的だった。

勝つチーム、成功するチームには一体感があると思います。

多くのチームスポーツでよく言われることですが、ラグビー日本代表もそれを今回のラグビーワールドカップ2019で体現してくれたのではないのでしょうか。自国開催となった4年に一度のラグビー界最高峰の大会で、目標としていた初のベスト8進出を達成した日本代表は、最後までこのONE TEAMの結束を示してくれました。

また日本人らしいなあと思ったのが、日本のファンが海外チームの国歌

を合唱したり、強豪ではないチームに大きな声援を送ったりしていました。いわば、日本の「おもてなし」を受けた他国の選手達が試合後に、日本式の「おじぎ」で感謝を伝えるシーンが繰り返されたりもしたのです。ラグビーワールドカップ杯という大舞台で、日本らしさをふんだんに感じさせてくれる大会だったからこそ、見る者の心を揺さぶり、感動という波を起こさせたにちがひありません。

●【「祈り」とは、生きる事への誓い】

先月末に『地鎮祭 (じちんさい)』の「依頼があり、台風迫る大雨の中で御祈禱させていただきました。」

さて、この『地鎮祭』という節目の行事ですが、あまり馴染みのない言葉かもしれませんが、新築の住宅を建築する際に行う「祈り」です。

日本には八百万(やおよろず)の神という言葉がありますが、自然界のあらゆるものなどに神仏が宿るとされています。

『地鎮祭』では、これから家を建てようとしている土地に宿る神様(氏神様)を鎮め、
・「この土地で新居を建築させていただきます」
・「この場所で、これから私達が生活をさせていただきます」

何卒、よろしくお願い申し上げます…と。

神仏に対する畏敬の念をもってご挨拶し、工事着工から完成に至るまでの安全をお見守り下さいという「祈り」、それが『地鎮祭』です。『地鎮祭』では、施主や施工業者、あるいは設計者や棟梁、職人などが一堂に会する機会でもあります。『異体同心(いたいどうしん)』という言葉がありますが、関係者がお互いに心を一つに統合する機会。土地の神様である神仏様と、関係各位による、まさに心一つにした『ONE TEAM』の誓いです。(↑神仏様には無礼ですが…笑)

施主ご家族の皆さまには、「本日は天候が悪いので、服装は軽装で結構ですよ」とお伝えしてありました。にもかかわらず、しっかりと身なりを整え『地鎮祭』に臨まれました。服装・身だしなみは、その人の心の表れでもあります。施主ご家族みなさまの心意気は、必ず八百万の神様に届いていることでしょう。自然と人生との触れ合い、そこに親しみと畏敬の祈りがあります。天地自然の恵み、五穀の作物・動物・魚などの命を私達はいただいて命を繋いでいます。そうやって私達も含め、命ある天地自然の動植物は皆、八百万(やおよろず)の神々によって生かされています。大自然の営みから教えられることは多い。一方では、天災によって人命を奪われるという恐ろしさも天地自然は兼ね備えています。幸も不幸も、天地自然から教えられ、地球という

大きな生命体によって生かされている命、大自然の姿そのものが、私達の姿でもあり、天地自然は私達に何らかの教訓を垂れているという受け止め方もできます。

そこに「畏敬」と「感謝」の“祈り”が生まれたのだと思います。

「祈り」とは、生きる事への誓い、感謝の思いを表現すること。大切なのは希望を持ち続けること。希望の喪失は、生きる力の喪失でもありません。畏敬と感謝の心を育んできた伝統的な祭祀・伝統文化を受け継ぎ守り伝えていきたい。いつの時代でも、科学技術が進歩し、ボタンの一つで便利快適に過ごせる「AI(人工知能)」の時代が到来するとしても、人間が生きてゆく上で決して忘れてはならない畏敬と感謝の念。それは、八百万の国に生かされる、私達日本人にとって、生きるという命の教育の中で最も大切な一つである「天地自然に生かされている」という畏敬と感謝の念。これを後世に伝える使命が、私達にはあるように思います。

●【悟りとは、いかなる場合にも平気で生きること】

十月と十一月は『御報恩会式(略して「御会式(おえしき)」)』月に当たり(真成寺は十一月三日です)、全国各地からお説教のお招きを頂きます。ある御寺院様へお招き頂いた時のお話しです…。

「ご住職である老大師のお寺様にお招き頂き、お檀家の皆様へのお説教を終え、数年ぶりに敬愛する老大師と対話させていただいた。老大師は数年前に大病を患い、満足に歩行することもできないお身体ながら、いまだその精神は寸分の揺らぎも感じさせない強い信念をお持ちでした。ただただ頭の下がる思いで、40分もの間、親しくお話しを頂戴させて頂いた。

人は誰しも、人に言えない「悲しみ」を抱いて生きています。

一見、何の不安も悲しみも持ち合わせていないように見える人でも、心の奥底には深い悲しみが秘められているものです。その「悲しみ」を抱いて生きていくことの大変さ、そしてまた、人の悲しみが分かることの大切さというものもあるでしょう。悲しみは、自分が辛い、苦しいという悲しみではない、「大悲(だいひ)」を抱いている人もいます。それは人間の持つ根源的な悲しみを一身に引き受ける大きな悲しみ(大悲)ということ。色んな境遇、色んな人生があるが、換言すれば、人生を生きたら「今を精一杯生きて行く他ない」ということになるでしょうか。

正岡子規(まさおかしき)が、死の2日前まで書いていた随筆集(エッセイ)、「病牀六尺(びようしよろくしゃく)」

に、次の言葉が遺されています。

「余は今まで、禅宗のいわゆる悟りということと誤解していた。悟りとは、いかなる場合にも平気で死ぬる事かと思っていたのは間違いで、いかなる場合にも平気で生きることであった」と。※正岡子規とは：明治時代の文学者で、近代文学に多大な影響を与えたとされる正岡子規。子規は、二十二歳のときに肺結核を発病しました。十二年もの間、結核に苦しみ三十四歳で亡くなっています。

今日一日を深く生きることは、元気で若い人には、なかなか解釈できない難しい問いでしょうが、「死」というものを意識することによって、「こんにち、ただ今」を深く生きることが出来るはずで、過去も未来もない。今この瞬間に命の全てを目の前のことに注ぐ…。

「生きる」ということは、今この瞬間を積み重ねること以外にはありません。

一寸先は闇とも言いますが、その言葉の通り、誰しも自分の寿命を知る事はできません。ただし、今ここにある自分の命をどう生きるかについては、「自分で選択できる」という自由があります。人生という「道」を決めるのは、他でもない。あなた自身の心ひとつなのです。

日蓮聖人は「極楽百年の修行は穢土(えど)一日の功德に及ばず」と喝破されました。「穢土(えど)」というのは…悩み苦しみの多い現実の世界のこと。

「極楽(ごくらく)」というのは…心安らかたで安穩な世界のこと。

悩みこそ、幸福の種。悩み苦しむ多き世の中なればこそ、真の幸福を感じられるのです。

●【幸福は心ひとつの置き所】

どの様な環境にあらうと、自分なりの幸せを感じつつ、現在に至っていることを思い返すとき、私は幸せとはまさに主観的なものであると強く思います。幸せと感ぜられるのか感じられないのか、その成否はあくまでも、当人の心の状態にあるのであって普遍的な基準など一切ないと言えるでしょう。人間には元々、煩惱(ぼんのう)の対局に位置する、素晴らしい心根(こころね)があります。人を助けてあげるとか、他の人のために尽くすことに喜びをおぼえるといった美しい「利他(りた)の心」を誰もが心の中に持っています。しかし煩惱があまりに強すぎると、なかなか表に出てこない。だからこそ、努力して煩惱を抑える事が必要です。幸福になれるかどうか、それは心のレベルで決まる。つまり、心ひとつの置き所です。

「花が咲いている。精いっぱい咲いている。私達も精いっぱい生きよう」…どんな場に置かれても、花はその場で光に向かって枝を伸ばして精いっぱい咲くのです。その花の姿に学びたいものです。

いまある自分の命に感謝して
『いのちに合掌』

合掌 副住職 谷川寛敬



来月の
ご案内です

『第十二回 冬至水行祭』

☆十二月十五日(日)です

★早朝の部 6:30

★午前の部 10:00

★日中の部 14:00

★冬至祈禱会(とうじしきとうえ) 15:00

★夜間の部 19:30